

現代モンゴル語における敬語

鯉 瀨 信 一

1、はじめに

社会主義国に生まれ変わったモンゴルでは、もはや敬語はほとんど使われていないと見る人もいるようである。確かに、社会主義的革命思想で一切の旧秩序を否定したある時期においては、敬語は旧封建社会の残滓として排撃され、モンゴル社会からその姿をほとんど消した時期もあった。

しかし、そうした革命後の混乱した一時期が過ぎ、社会が落ち着きを取戻すと、そこには新しい社会秩序が生まれ、その人間関係に見合った敬意表現の必要性が高まったのであろう、新しい社会秩序を基調として、敬語は“復権”したのである。もちろん、“復権”したといっても、相当の数の敬語が旧社会の崩壊とともに死語と化した。また、意味を変えて新しい社会に対応することになった敬語の数も少なくはなく、敬語の使用が極端に減少したことは否定できない。

しかし、現在のモンゴル人の実際の社会生活と、敬語が全く無関係ということではない。モンゴル人の生活の中に、敬語は厳然として息づいており、それなりの役割を果たしていることも事実である。むしろ、公的場面などでの敬語の使用は増大しているようにさえ見える。

このように、現代モンゴル語の中で、敬語の領域の占める役割は無視できるほど小さなものではないと思うのであるが、なぜか敬語研究は、充分に行なわれているとは言い難い状況である。諸外国のモンゴル語学者による研

究はもとより、モンゴル人研究者による研究さえも、ほとんどない状況である。モンゴルの言語学者R・ジャグワラルが、1976年に著した『モンゴル語の敬語』の中で「……ポッペ、レーリッヒなど2、3の論文はあるが、1冊の著書として刊行されたモンゴル語の敬語研究書はこれが最初のものである……⁽¹⁾」と述べているほどである。日本においても、卑見の限りでは1篇の論文もないように思われる。日本で出版されている何冊かのモンゴル語学習書にも、敬語の項は設けられていないし、モンゴルで現在使用している初等、中等教育課程のモンゴル語教科書の中にさえ特別の項目としては扱われていない。僅かに、語彙研究の一環として、いくつかの敬語が扱われている⁽²⁾のと、モンゴルの習慣などを述べた中学生用副読本⁽³⁾の中に簡単に見える程度である。

敬語表現を豊富に有しながら、このように、モンゴル語文法の中で敬語法が体系的に取扱われることが少ないのは、モンゴル語の敬語が文法的によりも、語彙的にあらわされるというモンゴル語敬語法の特徴に帰因しているのではないかと推察される。またモンゴルが、社会主義という国家体制下にあるため、敬語研究の資料として、まず採り上げられなければならないナマの言語資料が、外国人研究者には入手困難であったという事情も、少なからぬ影響を与えているものと考えられる。

本稿では、こうした現代モンゴル語の敬語に関する紹介が少ないことに照し、現代モンゴル語における敬語の概要を、モンゴルの近代化との係わりを考慮しながら述べることにした。

2、モンゴルの社会主義的發展と敬語

モンゴルが1921年に社会主義革命を起こしてから50数年になる。それ以前のモンゴルは、遊牧の経済を基盤とした、しかも前近代的なラマ教の圧倒的支配を受けた非常に遅れた社会であった。モンゴルの記録によれば、1921年当時、文字を解するものは約6,000人、すなわち全人口の0.7パーセントに過ぎなかったという。もちろん、工業と呼ばれるものは存在せず、

現代モンゴル語における敬語

ただ少数の職人が銀、鉄細工を行ない、家庭用品、仏像仏具の類を細々と作るだけだったという。⁽⁴⁾

そこへロシア革命の強い影響を受けた社会主義国家が成立し、ラマ教を追放し、合作社組織による集団的な牧畜を起こし、教育を普及させ、畜産品加工を中心とした軽工業を起こしたのである。文盲根絶運動を推進し、社会主義思想教育を徹底させ、それまで皆無であった工場労働者を生み出し、インテリゲンチヤを出現させたわけで、モンゴルにとっては、革命以降のこの50数年間は社会革命であるとともに、大きな意識革命であったと言える。

敬語は、言語活動の中でも社会制度、慣習、人間関係などに特に大きく影響される領域であるといわれる。遊牧的な、封建的な、またラマ教に支配された社会から、社会主義国家へという制度も価値観も全く異質な社会への急激な変化は、当然モンゴル語の敬語の領域に大きな影響を及ぼした。こうした社会の近代化に伴う敬語の変化の現象は、敬語一般の性格につながることを考えられるが、モンゴル語の敬語の場合、社会主義という国家体制のもとで政治的、イデオロギー的からの制約が加わったことも見逃せない。

元来、モンゴル語は敬意表現専用の語彙を豊富にもつ言語である。そして、それはモンゴルの社会において、あるいは家庭においても幅広い重要な役割を演じてきた。身分的、年齢的上下関係、あるいは僧俗関係といった社会秩序の中で、不可欠な要素となっていたと言えよう。

しかし、社会主義体制が確立し、旧来の封建体制が崩壊し、僧侶階級が一扫され、国民の間に社会主義思想が浸透するにしたがって、敬語は次第に使われなくなり、またその使い方にも混乱が生じてきた。

更に、1930年代に入って、敬語は階級性の強いことばであり、マルクス主義にとっての基本的な敵である階級観念の象徴であるとする見方、いわゆるマル (H. Я. Мapp 1864-1934) の言語理論がソ連から導入され、敬語排斥運動が盛んに推進されるに至って、敬語の使用は極端に減少した。

このマルの言語理論は、その引立て役であったスターリン自身の手によって、1950年6月のプラウダ（ソ連共産党機関紙）紙上で、「マルクス主義と言語学の関連について」という論文で否定されることになるわけである。⁽⁵⁾ R・ジャグワラルによれば、この「マルクス主義と言語学の関連について」が発表され、その中で、敬語が必ずしも階級的なことばでないことが理論づけられ、“復権”を獲得するまでの約20年間、日承文学および若干の文学作品を除いて、敬語はほとんど使われなかったという。⁽⁶⁾

社会主義国家における言語政策が政治的、イデオロギー的側面から進められる例はよく見受けられる。例えばモンゴルの新文字採用問題におけるロシア文字（キリール文字）導入までのいきさつ、あるいは中国領・内モンゴルにおいてロシア文字採用を途中で断念したいきさつなど、どれひとつをとって見ても、政治的色彩は隠せない。この敬語排斥運動が一般国民の日常生活の中に、どこまで徹底したかは疑問であるが、階級闘争というマルクス主義の基本的課題からすれば、座視できない重要な意味をもつものであったことは明らかである。

モンゴルは1921年に社会主義国家を建設したとはいえ、旧王公貴族階級、ラマ教との闘争、あるいは党内のイデオロギー的対立、対日戦争、更には隣国・中国の内戦などの混乱が続き、経済発展も思うにまかせず、国内体制も不安定な状況が続いた。マルの言語理論が否定された1950年前後は、そうした混乱も一応おさまり、1948年を初年度とした第1次経済・文化発展計画が進められ、漸く国家建設が本格的に軌道に乗り出したという時期であった。

社会主義体制が安定し、新しい社会秩序が確立してくると、その新しい人間関係に応じた敬意表現の必要が高まり、そこへ敬語の非階級的性格の理論づけを得て、敬語は徐々に使われるようになってくる。

R・ジャグワラルは1950年、1960年、1970年のウネン（モンゴル党・政府機関紙）紙上から若干の敬語を抽出し、その使用頻度の比較調査を次のように行なっている。⁽⁸⁾

現代モンゴル語における敬語

- (1) **бараалхах (уулзах, учрах)** ……「会う」の敬語形
 1950年 — 23回、1960年 — 47回、1970年 — 85回
- (2) **морилох (явах очих)** ……「行く」の敬語形
 1950年 — 13回、1960年 — 32回、1970年 — 68回
- (3) **зоог (идээ, ундаа)** ……「飲食物」の敬語形
 1950年 — 18回、1960年 — 34回、1970年 — 81回

この数字は、例に挙げられている敬語がウネン紙上では、党・政府の機関紙というその新聞の性格上、ほとんど外国使節の往来、接待などの極めて公式的な報道に使われていることを考えると、一概に、一般的な敬語の使用頻度の増加を示すものとは肯定し難いが、少なくとも敬語が公的立場からも、その“復権”を果した状況はよくわかる。

“復権”したと言っても、相当数の敬語は、旧社会の崩壊とともに、ほとんど使われることがなくなった。しかし、これは別に特別なことではなく、日本においても士農工商の身分制度が崩壊して、大名、武士に対して使われていた敬語が姿を変えたり、消滅の道を進んだのと同じで、王公貴族階級、ラマ階級が存在しない社会となったのだから当然のことといえる。こうして口承文学や文学作品の中などに、僅かにその姿をとどめるのみとなった敬語の例は宗教用語を中心として、枚挙にいとまがないが、いくつか例を挙げてみよう。

| | |
|----------------|-----------------|
| гүнцэг | (ラマ僧のとる食事の敬語形) |
| овоодой | (ラマ僧のかぶる帽子の敬語形) |
| зайран | (シャーマンに対する敬称) |
| шантав | (ラマ僧のはく下僧衣) |
| асаах | (着るの敬語形) |
| бойв | (靴、足の敬語形) |
| ламхай, ламтан | (ラマ僧に対する敬称) |
| ноёгтой | (王公の妃の敬称) |

敬語排斥運動によって、姿を消した後、“復権”して公的場面で頻繁に使用されている敬語の代表的なものは次のようなものであろう。

- бараалхах** (会うの敬語形)、 **алдар** (名前の敬語形)
мэндлэх (生まれるの敬語形)、 **айлчлах** (訪問するの敬語形)、
зооглох (食事を出すの敬語形)、 **өргөх** (持ち上げるの敬語形)
морилон ирэх, морилон одох (来る、行くの敬語形)
нас барах (死ぬの敬語形)

また、かつて王公貴族、高級官吏などを対象として使われていた敬語の中には、新しい社会に適應する形に意味を変えて使われているものも少なくない。

ноён —— 革命以前、王公貴族、高級官吏などに対する敬称として使われていたが、現在では、主に外国使節などに対する敬称として用いられ、モンゴル人の中で使われることはほとんどない。党・政府の指導者などに対しては **нөхөр** (同志) という敬称で呼ぶことを原則としており、また、外国使節でも主義主張、政治的立場を同じくするひと、友好国、兄弟党の指導者に対しては **нөхөр** で呼ぶことになっており、明確に区別して使われることになっている。

ноён は丁度、ロシア語の **гаспадин** にあたろうか。

хатаггай —— 王公貴族、高級官吏の夫人に対する敬称として使われていたが、現在では **ноён** と同じ使い方の女性に対する敬称である。従って、モンゴル人の中で使われることはない。

зарлиг —— 王公貴族の勅諭、勅命の意味で用いられていたものが、現在では党・政府など公的機関からの「訓令」といった使われ方をしている。

ところで、現代モンゴル社会においては、敬語は単に公的な“復権”を獲得したというだけでなく、積極的にその意義が認められているようである。それは、R・ジャグワラルが、現在敬語が活発に使われている場面として、政治指導者、外国使節に敬意を表す際、年長者を敬う際、および文学作品における文章表現の三点を挙げ、学校および社会における敬語教育の重要性を強調していることからも、また中学生用副読本「尊いしきたり」にモンゴルの継承すべき伝統の一つとして、敬語学習の必要性が説かれていること⁽⁹⁾などからも理解される。⁽¹⁰⁾

このように敬語の意義を積極的に認めようという意図の一つには、例えば、外来語導入、新用語制定に関してモンゴル国立用語委員会がその原則の一つに「民族的であること」を掲げて、外来語の母語化を強力に進めて⁽¹¹⁾いることと相通ずるものが感じられる。そこにモンゴルの伝統文化を継承しようという試みを見出すのである。

因に、“モンゴルのモンゴル人”として国民大衆から大変慕われたという前国家元首J・サムブーは、モンゴル牧民の生活と習慣について記述した著書の中で、「……どの家庭においても、遠くから訪ねてきた客があればそれが知人、知人でないにかかわらず、丁重に迎え、食事を準備し、一夜の宿を乞うものであれば気持ち良く休めるように寝所を整えるしきたりがあった。……年寄りが訪ねてくれば、その家のひとはそろって年寄り家を⁽¹²⁾出て迎え、馬の手綱をとって家の中へ迎え入れ、座る場所を選び、茶菓子を出して接待につとめ、年寄りが出発する時には馬の鞍を直し、手を添えて馬に乗せ、必ず中途まで見送って行くというしきたりがあった。……こうしたしきたりは現在でもなくなっていない……」と、長上尊重、客接待のしきたりについて誇らしく述べ、更に、その序文でこうした尊い伝統は継承されなければならないと強調している。

3. モンゴル語敬語の語彙的特性

モンゴル語の敬語は、何よりも普通語語幹に対応する別個の敬語形式専

用の語彙を豊富にもち、その交替によって敬語表現を行なうというのが特徴となっている。

モンゴル語敬語の語彙が豊富であると言っても、日本語あるいは「敬語形は数詞、接続詞を除く他のすべての品詞に認められる」というチベット語¹³などに比較すれば、決して多いとは言えない。しかも、社会主義制度下で敬語使用が極端に減少していることを考慮すればなおさらである。

しかし、日本語や朝鮮語が普通語幹に敬語的成分を付加して敬語形を形成する場合の多い¹⁴ということから見れば、モンゴル語の敬語表現が、こうした言語手段をとらずに、普通語語幹との交替によって敬語表現を行なうことが中心となるというのは、やはり特徴的なことと言って差つかえないのではないかと考える。

また、敬語形専用の語彙を豊富にもつと言っても、一つ一つのことば全てに敬語形が存在するわけではなく、名詞および動詞のなかにもみ存在し、その中でも身体器官名称、日用品、飲食事、生死、宗教および人間の基本的動作にかかわることばに特に多いようである。若干の例を挙げてみる。

(1) 身体器官名称

普通形 бие (身体) に対して敬語形 лагшин, (以下同様)

гар (手) → мугар дух (額) → магнай

чих (耳) → сонор, хөл (足) → өлмий,

хөх (乳房) → мээм, царай (顔) → дур

(2) 日用品

малгай (帽子) → овоодой, титим

хутга (ナイフ) → огтуур,

ганс (キセル) → шившүүр

аяга (小椀) → хундга

(3) 飲食事

идээ, ундаа (食物、飲物) → зоог,

цдэх, уух (飲食する) → зооглох

архи (酒) → сархад

хоол өгөх (食事を出す) → зоог барих

(4) 生死

төрөх (生れる) → гийх, мэндлэх, няраилах, хөнгөжих,

үхэх (死ぬ) → халих, 婉曲的な言い方として нас барах,

нас нөхцөх, тэнгэр болох, таалам төгсөх, бие барах,

бүрлээч болох,

(5) 人間の基本的動作

морь унах, явах, очих (馬に乗る、行く) → морилох,

үг хэлэх (話す) → айлдах,

үзэх, ажиглах (見る、観察する) → болгоох,

унтах (眠る) → нойрсох өгөх (与える) → барих,

ядрах (疲れる) → алжаах, инээх (笑う) → мишгээх

さて日本語では、敬語は研究者によって分類やその内実は一様ではないようであるが、一般的に尊敬語「相手や第三者についてその行為、所有の表現をとおして尊敬の気持をあらわすもの」、謙讓語「自分や自分側のものについて謙讓の意をあらわすもの」、丁寧語「自他にかかわらず、すべての物言いを丁寧にするもの」、美化語「素材を美化して表現するもの、またそれによって話し手が自分のことばづかいの品位への配慮をあらわすもの」などに区分されて論じられている。⁽¹⁵⁾

モンゴル語の敬語形語彙を、この概念規定で分類を試みてみると、尊敬語と謙讓語の二つにのみ分類され、丁寧語、美化語に相当するものは認められない。もちろん、これは語彙的に丁寧語がないということであって、丁寧な表現法がないわけではない。婉曲的な表現の中にはいくらでも見出すことができる。ただ、素材を美化して表現することはあっても、それによって話し手が自分のことばづかいの品位への配慮をあらわすという表現法は婉曲的なもののなかにも見当らない。モンゴル語の敬語形語彙を尊敬語、謙讓語に分類して例示してみる。

(1) 尊敬語

(イ) 名詞

зураг (画、写真) → хөрөг,

байшин (建物) → орд,

ДУУ (鉄砲) → үүгэвч

зочин (客人) → гийчин,

нэр (名前) → алдар,

хүүр (屍体) → шарил

(ロ) 動詞

урих (招く) → залах

зочлон очих (訪問する) → зочлох

унтах (眠る) → жаргах

гэрлэх (結婚する) → өргөөлөх

(2) 謙讓語

айлтгах (申し上げる) → амрыг айлтгах (ご挨拶を申し上げる)、
айлтгах бичиг (上申書)

барих (差し上げる) → бэлэг барих (プレゼントを差し上げる)、
итгэмжлэх жуух бичиг барих (信任状を奉呈する)

өргөх (献上する) → сүхбаатар хөшөөнд цэцэг өргөх
(スフバートル廟に献花する)、 тангараг өргөх (誓いを捧げる)

モンゴル語の敬語表現は、敬語形語幹の普通形語幹との交替によってなされると前述した。以下に挙げる若干の例から、単なる敬語形語幹との交替によって敬語表現が行なわれ、何らの言語的手段も必要としないということがよくわかる。(下線が敬語、→印が交替を示す)

現代モンゴル語における敬語

| | | | |
|-------------------------------------|---------------------------------|--|---|
| (きみ、 Чи ↓ <u>Та</u> | 昼の үдийн үдийн | 食事を хоол ↓ <u>зоог</u> | 食べる) ид ↓ <u>зоогло</u> |
|-------------------------------------|---------------------------------|--|---|

| | | | |
|------------------------------------|--------------------------------|--|--|
| (きみ Чи ↓ <u>Та</u> | どんな ямар ямар | 乗り物で унаагаар ↓ <u>хөлгөөр</u> | 行くか) явах вэ? ↓ <u>морилох вэ?</u> |
|------------------------------------|--------------------------------|--|--|

上のように、単純な語幹交替を原則とするが、敬語形がモンゴル語の特徴の一つとも考えられる連結語⁽¹⁶⁾的な形をとってあらわれることが少なくない。つまり、普通語と敬語が連結して、一つの意味を形成するというものである。次に例を示してみる。

| | | |
|---|-----------------------------|---|
| (名前は Нэр ↓ <u>Алдар нэр</u> | 誰と хэн хэн | いいですか) гэдэг вэ? гэдэг вэ? |
|---|-----------------------------|---|

“**нэр**” に対応する敬語は “**алдар**” である。従って、単に “**нэр**” と “**алдар**” が交替すれば済むわけであるが、“**нэр**” が失なわれず、“**алдар нэр**” というように連結して敬語形を形成している。意味は “**нэр**” の敬語形、つまり “**алдар**” と同意である。次に敬語形が普通語の後ろにくる例を示してみる。

| | | | |
|---------------------------|---|---------------------|------------------------|
| (あの人の Тэр хүний | 家は гэр ↓ <u>гэр өргөө</u> | あそこに тэнд | あります) байна. |
| Тэр хүний | <u>гэр өргөө</u> | тэнд | байна. |

また、モンゴル語の語彙には多くの外来語が見出される。その中でも特に多いのは、チベット語、サンスクリット語、トルコ語、中国語、満州語、ロシア語などからの外来語であるが、これらの外来語から、文化受容の様子がうかがえる。例えば、サンスクリット語やチベット語を語源とするものには仏教に関するものが多いし、満州語の場合は清朝帰属以降の官位、行政、軍隊などの語彙、中国語の場合は野菜、衣料などの物品、商売、手

工業などに関連したものの中に多いと言った如くである。こうした外来文化をうやうやしく受容したあらわれであろうか、敬語語彙の中にも外来語がしばしば見出される。

(1) トルコ語源 **хөрөг** (画、肖像の敬語) ⁽¹⁷⁾

хөлөглэх (馬に乗るの敬語) ⁽¹⁸⁾

(2) サンスクリット語源

лагшин (仏の身体、身体の敬語) ⁽¹⁹⁾

мутар (仏の手、手の敬語) ⁽²⁰⁾

шарил (屍体の敬語) ⁽²¹⁾

(3) チベット語源

цав (ラマ僧の食事) ⁽²²⁾

шантав (ラマ僧の下僧衣) ⁽²³⁾

4、いろいろな丁寧表現

モンゴル語では、未来形や疑問形、あるいは仮定法などを使い、つまり直接的表現を避け、婉曲な表現法をとって丁寧な物言いをすることによって、敬意をあらわすといった方法がよくとられる。こうした方法はモンゴル語ばかりでなく、日本語やほかの言語でもよくとられることであり、特にモンゴル語だけに見られるというものではないが、モンゴル語における敬語のすがたを把握するうえで、モンゴル人が“丁寧”と感じる間接的な表現も考慮する必要がある。

2、3の例を挙げてみる。

この種の表現は、話し手と聞き手とが直接かかわり合うものが多いから、当然のことながら、ある事柄を客観的に表現するような叙述文にはなく、命令、依頼、希望や疑問などの形によくあらわれる。

まず、表現のスタイルを丁寧にする方法の一つは、断定的な物言いを避け、相手の意向、意志を尋ねる方法である。「**Тэнд явья,** (あそこに行きましょう)」と自分の意志を表明するかわりに「**Тэнд явах уу?**

現代モンゴル語における敬語

(あそこに行きましようか)」と相手の意向を尋ねることによって丁寧さを表現することができる。上司の部屋に入ろうとする部下が「**Орох уу?**

(直訳すると、入りますか、入りましようかの意)」と言っているのをよく耳にするが、これなどは上司が部下を呼んだ場合でなくても使われ、「入ってよろしいですか」と訳さざるを得ず、相手の意向を尋ねる丁寧表現の例であろう。また、条件的表現を用いて「**Хийж өгвөл баяртай** (～してくれれば嬉しい)」といった表現も見られる。

特に改まった場合など、よく動詞語幹に現在形語尾 **на, нэ, но, нө** を接尾し、更に疑問の助辞 **уу** あるいは **үү** をつけた「**Сууна уу**」「**иднэ үү**」といった使われ方をする。これは疑問助辞がつけられてはいるが疑問文ではなく、「どうぞお座り下さい」、「どうぞお食べ下さい」と訳され、極めて丁寧な依頼をあらわす。従って文末に疑問符がつけられることはない。(**байна уу?** については例外で疑問形として使われる)

命令表現にはいろいろな婉曲的表現のほか、丁寧表現専用の語尾もある。婉曲的な表現としては、前述したような疑問形を用いたり、条件的表現を用いて「**～ хийж өгвөл баяртай** (～してくれれば嬉しい)、依頼の形をとって「**～ хийж өгнө үү** (～して下さい)」なども丁寧さを表現する。

丁寧表現専用の語尾にもいくつかの種類があるが、一般的なものを2、3例示してみる。

- (1) **аач, ээч, ооч, өөч** (母音調和、正字法によりこのほかいくつかの形があるが省略、(2)、(3)も同様)

動詞語幹に付けて「**яваач** (行きなさいよ)、**идээч** (食べなさいよ)」——懇願的な要求を示すもので、(2)と比較して丁寧度はさがる。余り目上の者には使用しない。

- (2) **аат, ээт, оот, өөт**

動詞語幹につけて「**уншаат** (読んで下さい)、**суугаат** (座って下

さい)」——(1)の **Ч** は 2 人称単数の **Чи** (君、おまえ) で、(2)の **Т** は同じ 2 人称単数の敬語形 **Та** (あなた) である。従って(1)は「**Уншаа чи**」、(2)は「**Уншаа та**」であり、(2)は目上の者に対してのみ使用される。

従って(1)、(2)とも動詞語幹に **аач, аат** を附けるといふより、形動詞形 **яваа** に語尾 **Ч, Т** を附けることになる。

(3) **аарай, ээрэй, оорой, өөрэй**

動詞語幹に附けて「**уншаарай** (お読み下さい)、**суугаарай** (お座り下さい)」——要望、願望をあらわす比較的丁寧な表現で、誰に対しても使用できる。

(4) **гун, гүн**

動詞語幹に附けて「**ороггун** (入られたし) **ирэггүн** (来られたし)」——重々しく丁寧な命令をあらわすが、口語ではほとんど使われず、公共機関の出す公示などで主に使われる。

※ ジャグワラルは(1)、(2)、(4)の語尾を「敬語接尾辞」として説明している。²⁴⁾

5、呼称と敬語

敬語が少ないと言われる言語でも、相手をどう呼ぶかという呼称には、複雑な敬語要素が含まれているようである。

中国語においては、「敬語は、古今を問わず相手をどう呼ぶか、あるいは自分をどのように呼ぶかという呼称の問題に大きな比重がおかれる²⁵⁾」というし、敬語がないと言われる英語でさえ、「“英語にも敬語がある”という時、第一にその例として示されるのが対称詞、すなわち聞き手に対する呼びかけに用いられる表現であろう²⁶⁾」と言われる。こうした相手をどう呼ぶかといった呼称の中に敬語表現をもつというのは、おそらく、ほとんどの言語についていえることであろう。

モンゴル語においても例外ではない。例えばモンゴル語では、子供が親

現代モンゴル語における敬語

の名前を、妻が夫の名前を、弟子が師の名前を、あるいは年少者が長老の名前を直接呼ぶことをタブー視する習慣があった。子供が親の名前を直接呼ばないとか、妻が夫の名前を呼ばない（日本では現在、若い層の中にはこの習慣はほとんどなくなったが）ということは、日本においても同様であるが、モンゴルの場合、そればかりでなく、夫あるいは父母と同名のひとの名前さえ呼ぶことができず、**ХЭЦҮҮ НЭРТ**（「口にするにしのびない名前をもつお方」とでも訳せようか）ということばで呼んだという。またその名前が、例えば“虎男”というものであれば、“虎”ということばが使えずに、虎を「**ХЭЦҮҮ НЭРТ**」動物」というような代用語で呼んだりした。夫についてのこうした習慣はほとんど姿を消したが、現在でも両親の名前に関しては、まだ若干残っており、また師の名前を直接呼ぶことをせず、**Ринчен** 先生なら **Ре** 先生、**Дамдинсүрэн** 先生なら **Да** 先生といった様な呼び方はしばしば行なわれる。こうしたことから、モンゴル語の敬語の中では、相手をどう呼ぶかといった呼称の問題が大きな領域を占めていることが理解されよう。

以下、親族関係・非親族関係にわけて若干の呼称例を示してみるが、日本の場合もそうであるように、モンゴル語の呼称も、親疎の度合い、それぞれの場面など色々な条件によって、必ずしも一定していない。ここに示したものは、一般的な例であることを付言しておく。

(一) 親族関係の呼称

(1) 話し手が親族関係で上位の聞き手に対する場合

- ① 子供は父・母のことを「**аав**（お父さん）、**ээж**（お母さん）」（現在、十代位いの若者の中には父・母を **эцэг, эх** で呼ぶ者もいるという。

эцэг, эх は主に文語体に使われるが、口語で使われる場合は、敬意は **аав, ээж** よりも底いと考えられている）と呼び、父・母の名前を直接用いて「ゴンボさん、ドルマーさん」とは呼べない。両親の名を直接呼ばないという習慣は、特に親族関係では現在も根強く残っているようで、例えば、義兄が父と同名の場合、その名前

を呼ばないで **ХЭЦҮҮ НЭРТ**、あるいは背の高い義兄であれば **ӨНДӨР АХ** (ノッポの兄さん)、太った兄であれば **БҮДҮҮН АХ** (太った兄さん) などと呼ぶ。

- ㉞ 弟・妹は兄・姉のことを「**АХ** (お兄さん)、**ЭГЧ** (お姉さん)」あるいは名前のあとに **АХ**、**ЭГЧ** をつけて「**ПАРТЛ АХ** (パートル兄さん)、**ТЭТЭГЭГ ЭГЧ** (ツェツェグ姉さん)」と呼ぶ。呼捨てはもちろん、日本語の「——さん」にあたる **ГУАЙ** を用いて「**ПАРТЛ ГУАЙ** (パートルさん)」という呼びかたもしない。これは従兄姉の場合も同様である。
- ㉟ 祖父・祖母のことは「**ӨВӨГ ААВ** (お祖父さん)、**БУУРАЛ ЭЭЖ** (お祖母さん)」と呼び、父・母の場合と同様に、名前を用いては呼ばない。
- ㊱ 伯父・伯母および叔父・叔母のことは、名前の頭文字 2 字のあとに **АХ**、**ЭГЧ** をつけて、例えば **Лувсан** (ロブサン)、**Цэцаг** (ツェツェグ) という名前に対しては「**Лу ах** (ロー兄さん)、**Цэ эгч** (ツェ姉さん)」と呼んだり、「**хөгшин ах** (年とったお兄さんの意)、**хөгшин эгч** (年とったお姉さん)」と呼ぶ。名前をそのまま用いて「**Лувсан ах** (ロブサン兄さん)」とも呼べるが、伯父・伯母に対しては、両親よりも年長者であり、敬意を表する意味からも「**Лу ах, хөгшин ах**」と呼ぶことが多いようである。また㉞にみた兄・姉に対すると同様、名前には「**гуай**」をつけて呼ぶことはしない。
- ㊲ 子供は父・母に対して自分のことを「**БИ** (私)」と呼び、自分の名前を用いて「**Тумул**、**Тя**」あるいは「**ХҮҮ** (息子)、**ОХИН** (娘)」とは呼ばない。これは兄姉、祖父母、伯父母など目上の者に対しては全て共通である。
- (2) 話し手が親族関係で下位の聞き手に対する場合
- ㊳ 父・母は子供のことを、名前を用いて「**Тумул**、**Тя**」とも「**ХҮҮ** (息子)、**ОХИН** (娘)」とも呼ぶことができる。

現代モンゴル語における敬語

⑥ 父・母は子供に対して自分のことを、「**аав** (お父さん)、**ээж** (お母さん)」と呼べるが、名前を用いては呼べない。(自分の名前を使わないのは、兄姉、祖父母、伯父母などでも同様である。)

⑦ 兄・姉は弟・妹のことを名前を用いて「**Тумул**、**Тая**」とも「**дүү**(弟)、**охин дүү**(妹)」とも呼ぶことができる。

(3) 夫婦関係の場合

前述したとおり、旧社会では夫婦間の呼称は厳格で、決して妻が夫の名前を口にするとはなく、また2人称代名詞も **Та** (**Чи**、—君、お前—) に対して敬語的要素が強く、あなた、あなた様の意) が用いられ、「**Чи**」で呼びかけることは全くなかったと言われる。しかし現在は、そうした習慣は全く姿を消し、夫婦間は名前、あるいは「**Чи**」で呼び合っている。年寄りの中には、夫を「**Та**」で呼ぶものが多いが、若い層では、「**Чи**」で呼ぶことは、却ってよそよそしい感じを与えてしまい、敬意をあらわすどころか、夫婦間の会話にそぐわないと考えられているようである。これは夫婦間ばかりでなく、友人間においても同じで、親しくなっても「**Та**」を用いて呼びかけると相手に不快感を与えたりする。

(二) 非親族関係の呼称

(1) 年齢的上下関係

日本語とモンゴル語の呼称に関する違いの一つは、人間関係の上下関係の境界線がどこにあるかで見出せる。すなわち、日本語では同世代でも僅かな年齢の上下差によって、敬語的配慮が強くなるが、モンゴル語の場合には、同世代なら年齢の差は余り問題とならないのである。例えば日本語では相手の年齢を知らないで話していたひとが、その話の中で相手が自分より年上であることを知ると、それが僅か1才違いであっても、急にことばづかいを改めるといったケースがよくあるが、モンゴル語では、同世代なら年齢の差はほとんど問題とされない。因に、幾人かのモンゴル人に、敬語的配慮を必要としないその年齢幅は何歳位いかと質問してみた

ころによると、ほぼ10歳位という回答がほとんどであった。

親族関係の項で述べた兄弟の関係、身分的上位者あるいは初対面の場合、公的場面などいくつかの条件下以外では、ほとんど「**Чи** (君、お前)」もしくは名前の呼捨てで呼ばれ、名前のあとに「**гуай** (~さん)」をつけたり、「**Та** (あなた、あなた様)」を用いて呼ぶことはない。「**Та**」や「**гуай**」を用いると、夫婦の項で述べたように、距離をおいた、よそよそしい表現となってしまう。ただ親しい間柄においては、名前を呼ぶ際、名前の半分だけで呼びかけて、例えば「**Төмөрбаатар** を **Төмөр, Цэвээнсүрэн** を **Цэвээн**」と愛称的に呼んで親近感を表現することが広く行なわれている。

同世代間においてはほとんど敬語的配慮がなされない反面、同世代を超えた年齢的上下差の大きな相手に対しては強くその配慮がなされる。必ず「**Та**」あるいは「**гуай**」で呼びかけ、さらに年長者に対しては、「**Өвгөн гуай** (おじいさん)」と呼び、名前を用いて呼ぶことはない。

また、目下の者に対しては、明確な身分的上位者(職場内の上司、あるいはモンゴルの社会通念上の地位上位者、例えば党・政府指導者など)に対する以外は「**Та**」「**гуай**」で呼ぶことは全くない。

(2) 同一職場内の関係

同一職場内での呼称は、地位的上下関係の条件が介入しないかぎり、上に述べた年齢差による呼称の原則が適用される。すなわち、同一職場内にあっても、通常、同世代間においては「**Та**」「**гуай**」が用いられることはなく、「**Чи**」もしくは名前の呼捨てで呼び、年齢的上下差の大きな相手に対しては「**Та**」「**гуай**」が用いられる。日本では、職場外では、「~ちゃん」とか呼捨てで呼びあっている間柄が、職場内では「さん」や「君」づけで呼んだりする例をよく見かけるが、モンゴルでは、よほど改まった公的な会議などで、職名で呼んだり、敬称として「**Нөхөр**(同志)」が呼びかけに用いられたりすることがあるが、一般的に呼称が変わるといったことはない。

同一職場内においては、年齢的上下関係のほかに、当然地位的上下関係が呼称の問題にかかわってくる。地位上位者に対しては「**Та**」「**Гуай**」あるいは職名でもって呼ぶ。特に直属の上司に対しては「**гуай**」より職名で呼ぶことが一般的である。なお、この場合の職名は「**Хэлтсийн**

дарга (局長)、**Тасгийн дарга** (課長)」といったように職名をそのまま用いることはせず、単に「**дарга** (長)」と呼ぶことが多い。また名前のあとに「**дарга**」をつけて「**Гомбожав дарга** (ゴムボジャブ長)」というふうに呼ぶことも多い。

また年長者であっても、地位上位者に対しては上のような敬称を用い、逆に地位上位者であっても、年長者には「**Та**」「**гуай**」を用いて呼ぶ。

(3) 場面的呼称

年齢的上下関係、地位的上下関係が呼称の問題を決定することを述べたが、このほか状況的条件、つまり公的な場面か、あるいは私的な場面か、初対面か否か、恩恵を与える側か、受取る側かなども呼称に当然影響を与えることになる。

例えば、デパートの店員は客に対して、その客が一見して明らかに年下と判断できる場合以外は決して「**Чи**」は用いないし、また患者は医者に対して、たとえ医者が年下であっても「**Чи**」は用いず「**эмч** (お医者さん)」という職名をもって呼ぶ。生徒の父兄が教師に対して「**багш** (先生)」と呼ぶなども一例である。呼捨てで呼びあっていた間柄が、公的な会議の席上などで職名で呼んだり、「**Нөхөр** (同志)」という敬称をつけて呼ぶことは前述したとおりである。

おわりに

モンゴル語の敬語は、日本語の敬語ほど内容においても、用法においても複雑さはなく、日本語と比較すれば格段にやさしいと言える。しかし、いくらやさしいと言っても、敬語はその社会の身分関係、社会的距離などを反映して表現されるものであり、モンゴル社会の“人間関係”の正し

い理解が困難な外国人には、やはりとまどいの多いことばであろう。

日本とモンゴルの交流は、経済、文化関係を中心にして、徐々にではあるが発展の兆しをみせている。将来、モンゴル社会の中に入ってナマの言語資料を収集することも可能となるに違いない。現代モンゴル社会における“人間関係”の解明が進められ、多くの敬語研究が発表されることを期待したい。

本稿は、R・ジャグワラル氏の著書「モンゴル語の敬語」に負う所が大きかった。また、モンゴル師範大学のトムルトゴー氏（前東京外語大客員教授）、在日モンゴル大使館参事官ゼネメデル氏、同書記官ダシプレブ氏、同書記官ツェヴェーンズレン氏のご教示を得た。記して謝意を表する。

注

- (1) Р. Жагварал, Монгол хэлний хүндэтгэлийн үг, Улаанбаатар 1976,
- (2) Ж, Төмөрцэрэн, Монгол хэлний үгийн сангийн судлал, Улаанбаатар 1974.
Ц. Өлзийхутаг, Монгол хэлний үгийн сангийн судлал, Улаанбаатар, 1973.
- (3) Х. Нямбуу, Хамгийн эрхэм ёсон, Улаанбаатар 1969.
- (4) 木村肥佐生訳 『モンゴル人民共和国』上・下 外務省中国課・昭37
- (5) 田中克彦 『言語の思想』日本放送出版協会・昭50に、マルの言語理論の盛衰を詳しく述べている。
- (6) Р. Жагварал 前掲書45頁
- (7) 木村肥佐生『モンゴル族の古典文化と宗教』東洋学術研究・昭41、田中克彦・前掲書 159頁
- (8) Р. Жагварал 前掲書45頁

(9) Р. Жагварал 前掲書 8頁、21頁

(10) Х. Нямбуу 前掲書 26頁

(9)、(10)の両書は、モンゴル国民教育省の発行によるものであり、同省の審査を経て発表されたもので、政府の見解と大きな相違はないと判断される。

(11) А. Лувсандэндэв・モンゴル国立用語委員長はアジア研究所モンゴル調査隊(昭52・8)との会見で、新用語制定に関し「科学的根拠にもとずき民族的であること、組織的系統的であること、統一的であること」の三原則をもってしていると述べた。

(12) J. Самбуу, Малчин ардын амьдрал ахуй, хэв заншлаас
Улаанбаатар, 1971.

(13) 北村甫『チベット語の敬語』(敬語講座 8)明治書院・昭49

(14) 梅田博之『朝鮮語の敬語』(敬語講座 8)明治書院・昭49

(15) 宮地裕『現代の敬語』(講座国語史 5)大修館書店、辻村敏樹『日本語の敬語の構造と特色』(岩波講座日本語 4)岩波書店

(16) 神沢有三『モンゴル語における異音覺語』(亜細亜大学教養部紀要第12号)・昭50は Хоршоо үг を「異音覺語」と訳し、詳細な説明を加えている。尚、Хоршоо үгに関しては Р. Ринчен, Монгол бичгийн хэлний зүй Улаанбаатар 1967 に詳しい。

(17) S.D. Sanzheyev, Modern Mongolian Language, Moscow 1973, P.46

(18) N. Porre, On Some Honorific Expressions in Mongolian, Tokyo, 1970, P.492

(19) Ж. Төмөрцэрэн 前掲書 51頁。 N. Porre 前掲書 493頁。

(20) Я. Жагварал 前掲書 91頁。 N. Porre 前掲書 495頁。

(21) Р. Жагварал 前掲書 91頁。 Ж. Төмөрцэрэн 前掲書 51頁。

(22) Р. Жагварал 前掲書 91頁。 Ж. Төмөрцэрэн 前掲書 56頁。

(23) Р. Жагварал 前掲書 91頁。

- (24) Р. Жагварал 前掲書34、39頁。
- (25) 輿水優『中国語における敬語』（岩波講座日本語 4）岩波書店、昭52。
- (26) 久野暲『英語圏における敬語』（岩波講座日本語 4）岩波書店、昭52。